

戦姫絶唱シンフォギア ~ゲイツリバイブ無双 なお、デメリット  
は改善されないものとする~

暇人XX

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ノイズが蔓延る世界にいま1人の救世主が降り立つ。

誰にも貫けね赤きボデイ。誰も追いつけぬ青き翼

いま、最強救世主のイル・サルバトーレが始まる

(変身するたびに身体中がボトボトなんですけどどうすれば良いですか  
(泣))

※なおデメリットは改善されない模様

# 目次

歌姫の出会い	20	X	X	
救世主(笑)爆誕	6	???	???	
代償と意地	11	20	4	X
設定	18	20	6	8
■■■■■	23	20	8	
預言者の『祝え』	27	20	4	○
陽だまりと救世主の太陽	33	20	○	○
息抜き	45	20	2	0
双翼の歌	51	20	4	8
激闘乱戦	59	20	4	8

## 歌姫の出会い20XX

ノイズの出現に人の声が聞こえる。

都市が燃え上がり、昼間なのに夕方の如く紅く染まる街に声が、悲鳴が響き渡る。

突発的に現れるノイズの前に、近くにいた人々は悲鳴を上げる暇もなく炭素に変換してこの世から消えた。

次に運良く少し離れた場所にいた人々が叫び声を上げてノイズ達の魔の手から逃れようと走り出す。その叫び声が遠くに響き恐怖が伝染しパニックが起こり、緊急警報が鳴り響くが逃げ惑う人々の悲鳴や断末魔が飛び交うなかでは、何一つ効果はなかった。

認定特異災害ノイズ。通称『ノイズ』

災害と呼ばれる奴らは文字通りの神出鬼没で、いきなり現れたかと思えば触れた人々を炭素に変え死滅させていく。さらにノイズには極めて厄介な能力がある。

位相差障壁ーノイズが持つ最大の脅威であり非実体となる能力。これがある限りノイズはあらゆる攻撃が通じず、銃弾や大砲更には、爆風のような物でさえ通じないのだ。しかも実体が現れるのは、人間を殺す時しかない。

これにより、ノイズに対して人々が築き上げた文明の力は無駄であり。人々はノイズがこの世界に居られる時間が過ぎ去るまで無様に逃げ惑うしかできないのだ。

「ああ……」

その中で一人の男が足をつまづかせてこけた。こけた先にはノイ

ズの集団。男は必死になって起き上がるが目の前のノイズにより恐怖で足がすくむ。

「た…ずけで、…:…だずげで!!」

男は涙を流し助けを求めろ。

しかし、人の性と呼ぶべきかな倒れた男を見て逃げ惑う人々は、

( (ちようどいい、 困だ。 自分達の逃げる時間稼ぎになる ) )

誰もが思いそう叫ぶ男の声を無視して逃げ続けた。しかし、誰が彼らを責めてようか。人間は命の危険に関わると自分の身を最優先にして守る。生き物としての最優先事項に従う彼らを責め立てれるものはない。

「あ…ああ、 ああああああ!!!」

泣き叫ぶ男の前に、無慈悲にも!ノイズが差し迫り男の悲鳴が響き渡った…:

|| || || || || || || || || || || || ||

少し遡り現在

逃げ惑う人々がいる町に、2人の少女がいた。

ノイズから逃げ惑う他の人とは違いノイズに向かって歩を進める。

側から見ればそれは、自殺志願者にしか見えないものだろう。ノイズ共も彼女達に気付き灰にせんとばかりにその体を動かしている。数秒もすれば少女達の体を貫き灰にしてしまう。それは、本来なら避けようの無い事実だった。

…:…そう、本来なら、

「Croitzalronzell Gungnir ziz  
z1」

歌が聞こえた。ノイズを殺す憎悪と決意の歌が、

「Imyuteus amenohabakiritrone」

」

歌が聞こえた。人々を護らんとする防人の歌が、

その瞬間、光と共に彼女達の姿は変わる。所々に機械が付けられたスーツを纏う。その手には、天を貫かんばかりの槍を、かたや総てを斬り裂かんとする剣が握りしめられていた。

二人を灰にしようとして差し迫ったノイズ達は、彼女達の変身と同時に斬り裂かれた。本来なら触れることすらできない人間の手によって、

シンフォギア。正式名称は—FG式回天特機装束。

世界に現存する神話の武器『聖遺物』と、とある天才科学者の技術によって作りあげられた対ノイズ決戦兵器。

その力は、

1. ノイズの炭素変換を無効にするバリア。
2. 特殊な音波によるノイズ達の実体化。
3. シンフォギアを纏った奏者達が『歌う』事で出力を上昇させる特殊機構。

少女達は歌いながらノイズ達の群れに躍り出る。槍を持った少女—天羽奏が先陣を切る。シンフォギアを纏い、強化された脚力を使って飛び上がりそのまま体重を乗せ槍を振り下ろす。振り下ろされた槍が小さなクレーターを作りノイズ共を道路と一緒に叩き潰す。

次に剣を持った少女—風鳴翼がクレーターを飛び越え後陣のノイズ共を斬り払う。奏の放った力任せの一撃ではなく、すれ違い様に一線。一体一体流れる様にノイズを捌いていく。その速度はノイズ達に逃げる隙どころか、回避する隙さえ与えぬ程である。

二人の連携で徐々にだがノイズ達が倒されていく。しかし、ノイズ達の大群はまた一つまた一つとぞろぞろ現れてくる。

「まだこんなに残って……、ガッ!!?」

「奏、危ない!」

戦いの最中に奏の動きが急に止まる。その隙を狙ってノイズ達が迫るが翼が間に入る守る。

『奏、大丈夫か！』

奏の耳に通信機から声が聞こえる。

「ああ、ちよつとふらついただけき。旦那、まだ行ける。」

『無理をするな。急いで帰投しろ！翼、奏が無茶をしない様に援護に回れ。』

「分かりました。」

「クソ、時限式じゃこれが限界なのかよ！」

通信が切れた後に口が血を流しながら奏が地面を殴り付ける。

《時限式》

奏と翼、二人ともシンフォギアを纏う奏者であるがこの二人には決定的な違いがある。それは、翼が天然物シンフォギア奏者に対して、奏は後天的にシンフォギア装者になったと言う違いだ。奏にはシンフォギア使えるが纏えるだけの適正がなかった。

しかし、彼女はノイズに対する強い復讐心を支えに足掻き続けた。LINKE Rと呼ばれる適合率を上げる薬を投与する薬物実験。激痛など生温くすら感じられる正に、地獄と呼ぶべき実験を乗り越えて至った力。それでも翼の様に長時間纏い続ける事は出来ず。纏える時間が決まっている《時限式》と呼ばれる物になっている。

奏が己の力の無さに苛立ちが強くなっていく時、

ーあああああああ!!!

突然叫び声が聞こえた。!

「まだ、逃げ遅れた人が……、奏！」

叫び声に驚き少し固まった翼を尻目に奏が駆ける。身体に感じる倦怠感や吐き気などを無理やり押し込め走り出す。

(間に合え、間に合ってくれえ！)

頭の中で願いながら奏が走る。

ノイズに家族を殺された瞬間、それが頭の中を駆け巡る。自分と同じ様な目にあう人達がいる。それは、自分の味わった絶望感を誰かに味わって欲しくないという気持ちと、既に襲われ炭になったであろう

と考える自分に、力を手に入れても救う事すら出来ない無力さを払いさろうとする気持ちがあった。

奏走り、叫び声の中心であろう場所に辿り着く。

ノイズ達が作り上げた地獄に、

「えっ……っ？」

そこに会ったのは炭だった。中心部を囲むように円状に大量の炭がある。しかし、そこに叫び声を出した男の炭は無い。

「あっ……あ……」

中心にいるのは二人。先程の叫び声を出していたであろう男と、もう一人。

「なんだ、お前……っ？」

それは、仮面を纏った戦士だった。

赤を基調としたパワードスーツを纏い、胸部のアーマーはゴツく腹筋が割れている様な形状だ。

腰部部分には腕時計を大きくした様なベルトが巻かれてあった。片方にはまるで顔の様な何か、もう片方には砂時計に似た物が装着されている。

そして仮面には、

「ら…、ライダー……っ？」

仮面には、ひらがなでデカデカと「らいだー」と書かれている。それを見て奏は困惑していた。

そして、そんな奏に凝視されている仮面の戦士は、

(仮面ライダーになったと思ったら、ノイズと歌姫とOTONAが跋扈する世紀末であったの巻。ナンテコツタイ(〇)後、身体中が痛過ぎてヤヴァイ。)

盛大に焦っていた。

救世主（笑） 爆誕???

「どい…い…い？」

目が醒めるとそこは公園だった。……マジでどこやねん。ちよつと落ち着いて今の状況を把握しないと、

「え〜つと、確か今日は日曜だったはず。それで録画した仮面ライダージオウを観てゲイツリバイブライドウオッチが欲しくなった↓買いに行つた↓車にど突かれた。確かこんな感じだった……（0w0）へウエ!？」

あつれええ？おかしいぞー。車に轢かれた筈なのに無傷で公園で寝てる奴がいるらしい。……と言うか僕だった。って、違う作品のネタを2連続でやつてる場合じゃない！轢かれた筈なのに元気にしてる時点でおかしいのに知らない場所で目が覚めるとかオカシスギイ！荷物とかも無いし、

「取り敢えず、移動しな……ん？なんかポケットに入ってる。って、これ……。」

ゲイツリバイブライドウオッチちゃん。なんで、服以外は無一文で出された俺にこれだけあるん。何、コレ売って金にでもしろってか。馬鹿やる。売る気ないし売っても2日ももたんわ。

「と言うか……、ウオッチだけじゃ遊び方減るやん。せめてベルトとが無いといm『ゲイツリバイブ！』うおっ、ビックリした。俺ボタン押してへんって……は？」

起動してないリバイブライドウオッチが勝手に音が鳴つたと思つたら、ジクウドライバー（ゲイツウオッチ装填済み）が巻かれてた。なんでなん？取り敢えず回そうとしたけど全く動かんしベルト外れないし散々なんやけど。

「はあ…、本当にどうしy…「ノイズがでえたぞおお！」って、今度は何！」

公園の外に出ると色んな人が悲鳴をあげながら逃げていた。そこらの人に理由を聞くと何でも、ノイズって奴が出てきて逃げてるらしい。触れただけで人を炭にする化け物なんだって。……どっかで聞

いた様な気がするけど、何処やる？

「……って、考えてる場合ちゃうやん。逃げな死ぬやん。」

と言う訳で、公園からスタコラサツサだぜ！こんな所にいられるか！俺は逃げるぞ、スモーカー！

た…ずけで、…だずげで!!

ふと、声が聞こえた。助けを呼ぶ声が。

多分だけど、ノイズって奴に襲われてる最中なんだろう。ドンマイ。聞こえたけど俺じゃどうにも出来ないし自分から殺されにいくとかあり得ないし。来世あたりでいい感じになるのを祈っとるよー。……はあ、無理やって分かつとるけどなあ。

「貧乏くじ自分から引いてる気分やけど、仕方ないか。」

ベルト巻かれてるし、仮面ライダーの気分で精々から元気で頑張るか。ライドウオッチのボタン強く押す、

ゲイツリバイブ 剛烈!

リバイブライドウオッチを左にセットしたら急に音声が始めたし、なんか回転できる様になってるやん。まるで、ご都合主義だなあ。だったら、もう一つくらいご都合主義があっても良くない？

「とりあえず色んなこと後で考えるところとして、なんか行ける気がしなくも無い。変身!!?」

ベルトを回転させながら走る。身体を包む様に円状の何か出来るのを感じながら俺はノイズとやらが沢山いるであろう場所に向けて走り出した。

男は自分に迫りくるノイズに、誰も自分を助けてくれない現実に目を背ける為に目をつぶった。

視界の無くなったの世界で音だけが聞こえる。

街が燃える音、人々の泣き叫ぶ声。そして、

ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！

この場に全く似合わない軽快な音声が鳴る

「ウエエエエイ！」

次に、掛け声？らしき音とノコの様な音とそして何か爆発の様な音まで聞こえる。

「へっ？」

いつまで経つても訪れない死と、状況に不釣り合いな音に男は困惑しながら前を見る。そこに居るのは鎧の戦士。燃え上がる街の色の中でも色褪せない鮮やかな赤色の鎧を纏いながらノイズ達の方角を見つめている。

「あ、あの……。」

余りにも色んな事が起き過ぎ困惑して、戦士に話しかけようとした時、此方に向かって飛来してくる物体があり男は腰を抜かしそうになった。

リ・バ・イ・ブ剛烈！

剛烈！

もう一度音声が鳴る。それと同時に飛来した物体が戦士の顔面にぶつかる。余りの異常に男は気が狂いそうになったが、

「おい、あんた大丈夫か？」

鎧の男に声をかけられる。

「えっ、あ……、その……。」

声をかけられ焦って声が出ない。

「だから、大丈夫なのか聞いているの。」

もう一度声をかけられる。それが自分を心配してくれているものだと感じづく。

「ッ………は、はい！」

「あつ、そう。ならよし！危ないから伏せておいて。」

誰にも見捨てられ絶望の淵にいた自分を心配してくれているのだ。この戦士は！

「あの、……貴方は何者なのですか？」

男の質問に戦士は苦笑しながら、

「俺はゲイツリバイブ。唯の救世主かな？」

「……救世主。」

その言葉を皮切りにゲイツリバイブと名乗った戦士が前にいるノイズ共にノコのような物を振り抜く。瞬間、音が裂ける様な音と共にノイズが消滅した。そう、消滅したのだ。人間の力では倒せる筈のないノイズが、この戦士の力で倒される。そこから先は、一方的なものだった。ノイズが戦士に向かって突撃してくるが戦士の鎧に傷一つつける事なく弾かれる。さらにその弾かれた瞬間に戦士の拳がノイズを捉え粉碎する。先程まで他の人を襲っていたノイズ共もまるで吸い付く様に戦士に四方八方から迫ってくるが、まるで無意味。弾いて潰す、のこを振り抜き消し飛ばす。たったこれだけの動作でノイズを殲滅する。街に溢れんばかりのノイズ共は1体、また1体と消えていく。残り数十体切ろうという時に、

「……ッ！」

戦士の動きが急に止まり、肩を抑える。その隙にノイズ共が急に動きを変える。これまで数体ずつ飛んできていたのに数十体のノイズが一齐に飛んできた。その姿は黒い波というより戦士だけを確実に葬らんとする槍の様に見えた。

「あつ、危ない！」

以下に強固な鎧を纏うあの人でもこれは死んでしまうと感じ男は叫ぶ。

しかし、戦士はすぐさま腰の砂時計の様なものを武器に取り付けるジカンジャック!!？

その音声を皮切りに音楽が鳴り響く。明るく軽快なもので先程までの不安をが消し飛んでいくのを感じる。戦士が構える。武器には巨大な火輪が発生し高速回転している。

「オツラアア!!？」

スーパァーのこ切斬!!？

向かってくるノイズ共の群れにのこを振り抜く。

ノイズ共と巨大な火輪がぶつかり一瞬の拮抗の内、ノイズ共を全て消しとばした。爆発が起きて辺りにノイズだった炭が地上に向けて

落ちていく。辺り一面真っ黒な中、戦士と男の周りだけ綺麗なままでありそこに居るのは自分と右肩を抑える戦士だった。

(間違いない。この人こそが俺を、わたし達を救ってくださる救世主に違いない。)

男は戦士の姿を見てそう確信した。

「なんだ、お前……?」

不意に声が聞こえて見ると少女が戦士に向かって声を掛けている。戦士の……、我が救世主の活躍を知らぬ者らしい。我が救世主は答えない。ならば、代わりに私が祝おう。この世界で初めて我が救世主が救ってくださった家臣として。

「祝え!!?ノイズを駆逐し、新たな世界へ我らを導くイル・サルバトーレ!その名もゲイツリバイブ!

真の救世主がこの地に舞い降りた瞬間である!」

私の祝言に少女は目を丸くする。……それにしても、即興で作ったわりにはかなり良かったのでは無いだろうか?きつと、我が救世主も喜んでくださるに違いない。

そんな救世主様は、

(初めて助けた人がWON化してる件について。ああ、辞めて祝わないで!奏さんの目が冷めるのを感じるから。あと、右肩の感覚が無いんだけど!デメリット強すぎない?)

少女の目線の温度が下がるのを感じながら、恥ずかしさと驚愕で混乱している。

その仮面の中で大量の血を出しながら。

## 代償と意地204X

救世主(笑) side

前回までのリバイブ!

僕は極めて普通の専門学生。ある日の日曜日仮面ライダーのおもちやを買いに行くことになった。買う事に夢中になっていた僕は背後から来る黒づくめの車に気が付かなかった!背後からぶつかり空中をフロートした僕は目が醒めたら、戦姫が絶唱する世界だった! ……つて、こんな事考えてる暇ないつてかどうするべ。

(ヤヴァイ、マジでヤバイ。)

頭の中でひたすらヤバイしか出てこない。

「これは、あんたがやったのか?」

現実逃避をやめて目の前の少女を見る。燃える様な赤い髪にピツチリスーツから分かる凹凸ボデエ。そして某死神君と同じ様な声の少女。間違いなくあの人……天羽奏だ。

(つてことは、この世界は間違いなくアレやん。戦姫絶唱シンフォギアの世界やん。)

戦姫絶唱シンフォギア

言わずとされたこの世界。どんなアニメなの?と聞かれると見ていた僕も分からない。あえて言うなら、

1. 女の子が歌って戦ってラブコメ(百合に限る)

2. モブの命がピクミン

3. OTONAが最強。でもノイズには勝てない。いや、勝てるかもしれない。

こんな感じのアニメとしか良い様が無い。

そんなアニメで登場する少女、天羽奏は第1話に登場してそのまま退場してしまう人なのだ!……いや、初登場で推しになる事間違いない少女がいきなり死んでしまった時はマジでフロントムを生み出してしまふところでしたよ。と言うか天羽奏が生きているつて事は、

(ここはまだ原作の始まる前の世界つてことか。ん、待てよ。と言う事は奏さん1人で来たわけじゃ無いよな。もう1人くるやん。)

「奏！大丈夫。」

思考を遮り声が聞こえる。上を見ると青髪ポニーテールのボディスーツの少女が降りてきた。あれは、

（翼さんだー！しかも1期の初期にしかほとんど出ないOTOMEな翼さんじゃ無いか。）

2人のノイズと戦う奏者どっちも見られるとか俺ってすごいラツキーなのでは？

「奏、どう言う状況なの？ノイズは？」

「ノイズはあそこの変な奴が倒したらしい。」

「あれが……。」

2人の美少女にじっと見られる。普通の状況なら最高なのに。いや、普通でもかなりきつい。と言うか今の状況ヤバくない？正体不明の謎技術纏った奴がノイズを粉碎しましたとか。捕まったらゲイツリバイブはもちろん、最悪の場合俺が人体実験される可能性があるのでは……マジでヤバイ。

「我が救世主に対して変な奴とは。そう言う君達こそ変な奴なのでは無いかい？ピッチリとしたボディスーツをつけて恥ずかしく無いのかい？」

WOZ兄貴が奏さん達に向かってキレている。

（ヤメテ！ただでさえ今でも危険なのにこれ以上火に油を注がないで（汗）

「なんだと！さっきから訳の分からない事ばかり言いやがって。」

「奏、落ち着いて。彼らの策かも知れないから。」

WOZ兄貴に奏さんがキレて、翼さんが押さえる。ああ、もう無茶苦茶やないか。……待てよ、今ならこっさり逃げてでもバレないかも知れない。

（WOZ兄貴に気を取られてる間に逃げr……、ナンジヤナイあれ？）  
奏さん達の後ろ空間が歪んでる様に感じた。そしてそれは、黒い塊の様になって、

『周囲に高エネルギー反応感知！』

『奏え！後ろダア！』

通信機が鳴るより早く、黒い塊が奏者達を襲う。

「ハアア！」

黒い塊が奏者達にぶつかるよりも早くノコにぶつかり衝撃波が発生する。その衝撃に俺とノイズ、そして奏者達も吹き飛ばされる。

「ガッアアアアア！」

弾かれた衝撃やらで身体全体から痛みが走る。目の前で転げ回そうになるがスーツのおかげでなんとか耐えれた。

(なんでノイズはノイズでもヤベエ方の奴が来るんですかねえ?)

相手を見るその姿は何処からどう見ても唯のノイズが2体。しかしその身体から発される黒いモヤの様な瘴気は触れた物を一瞬の内にも炭に変え、耐えれた者でもその精神を歪ませてしまうであろう。本来ならこの世界には現れない筈の存在が現れたのだ。

(なんでカルマノイズが出てくるんだよ。どうする□今の2人じゃ敵わないし、俺が戦うにしてもさっきので右腕が完全に動かなくなつた。どうにか出来るか!?)

ノイズ共が体勢を構え直す中、動かなくなつた右腕からパワードのこを左手に持ち替え構えた。

救世主 side end

司令からの通信で振り向くと同時に目の前に黒い物体が差し迫る。

(間に合わない！)

そうよぎつた瞬間、破裂音と何かがぶつかり合う音が聞こえ、2人は地面に叩きつけられた。

……一瞬の気絶から目が覚める。そこには2体のノイズと謎の戦士、ゲイツリバイブとやらが構えていた。ノイズがたつた2体で現れる、それは今まで経験からではあり得ない事だった。本来ならノイズ共はいきなり大量に現れて人を殺していく存在。そんなノイズがたつた2体で現出したのだ。

(たった2体だけなら。)

奏は不自然さを抱きながらもノイズを殲滅する為に力を込める。

「はああああー！」

奏は既にシンフォギアを纏える時間は殆ど無い。だからこそ自分が持てる力を出し切り槍を振り抜く、

ガン!!?

渾身の力で振り抜いた槍がノイズに叩きつけられる。しかし、

「なっー！」

ノイズの身体には傷はついた。だが一瞬で再生して攻撃してきたのだ。全身全霊の力を攻撃に使い避けることも身を守る事もできずに奏は吹き飛び地面をバウンドしてビルに叩きつけられた。シンフォギアが解除され血塗れの奏が倒れている。

「奏えー！よくもおー！」

奏の状態を見て翼は怒りに身を任せて突撃する。残像が見える程の斬撃の嵐。それは翼の今まで生きてきた中で一番と言っているのだが、黒いノイズの脅威的な再生能力には敵わない。

『翼！落ち着け。まずは奏の安否を確認するんだ！』

「っ、了解しました。」

司令からの通信で戦線から離脱しようとする翼を黒いノイズの触手が襲うが、

「ダラっしやいー！」

ゲイツがもう1体との戦闘中に隙を見て援護する。こちらの方は少しずつだが確実にノイズにダメージを与えていた。

「奏、大丈夫なの。」

「ああ、これくらいなんでも……ガッ！」

心配する翼に気丈に振る舞おうとする奏だったが、先程のダメージとシンフォギアを纏う際に使っていたリンカーと言うクスリの副作用でたまらず口から血を吐き出す。そこに、黒いノイズが2体同時に狙いを定めて突進してくる。2人を庇う様にゲイツリバイブが前に立ち、

スーパードのこ切斬！

2体のノイズに巨大な火輪を叩きつける。巨大な爆発が発生する。爆発の衝撃でゲイツは吹き飛ぶ。爆発の発生源にノイズが1体たらずんでいた。ノイズはもう1度奏者達に向かって突撃してくる。ゲイツは吹き飛ばされた影響で間に合わない。ノイズの凶刃が奏者達を襲う。翼はせめて奏を守ろうと前に立つがそれを誰かが突き飛ばす。それは奏だった。落ちていたパワードのこを構えて突き出す。のこ切斬！

先程よりかなり小さい火輪がノイズにぶつかり、触手の様な部分が引き千切れる。

「あああああ！」

その代償に奏の右腕がボロボロになる。肉は裂けて大量の血が噴出する所々骨が見えかけてる。それでも奏は左手に持ち替えて、ノイズに追撃しようとする。

「奏！ダメー！」

翼が奏に抑えるが、

「どいてくれよ、翼。まだノイズがいるんだ。殺さなきゃいけないだよ。ノイズは殲滅しないといけないんだ！」

狂気に目を染め奏はノイズを殺そうと前が出るが、

「それは俺のだから返してくれ。」

目の前に出てきた、ゲイツに取り上げられる。

「返せよ！それがあればあの黒いノイズを倒せるんだ。いきなり現れて救世主を気取りやがって。そんなにあの野郎に祝ってもらって嬉しかったのか？私の身体なんかどうだって良い。私はノイズをこの世から消さないといけないんだ！」

奏はゲイツにもその狂気に染まった目で威嚇する。

「救世主気取りか、否定はしないしそれもある。祝ってもらおうの恥ずかしいけど悪くはない。」

ゲイツは取り上げた武器を左手で持つ。その腕は力なくぶらぶらしており、持つことしかできないのだと分かる。

「だからせめて守らしてくれ。気取ってるんだ。目の前の人くらいせめて守ってみせ無きや。だって俺は救世主気取りの大馬鹿者だから

な！」

そう言いゲイツはノイズに向かって走り出す。ノイズは再生した触手を突き刺していく。それらを真正面から受けのけぞりながらも前に前にと進み目の前にたどり着く。

「おらあー」

最後の力でパワードのこを振り上げる。アッパーの様な突き上げる一撃がノイズを空中に打ち上げる。

フィニッシュタイム！ リバイブ！

打ち上がったノイズに向かって飛び上がる。ノイズの前には無数の『きつく』の文字が浮かび上がる。

一撃！ タイムバースト!!？

『きつく』の文字がゲイツの足に収束していき放たれる必殺のキック「ハアアアアア！」

ノイズの身体を穿ち抜き風穴が開く。ノイズも再生しようと足掻くが巨大な爆発と共にこの世から消滅した。

「すげえ……。」

「あのノイズを殆ど一撃で……！」

凄まじい光景に唾然とする2人を横目にその場から去ろうとするゲイツ。

「まっ、待ってくれ！」

奏達が後を追うが一瞬の内に見失ってしまった。

「何だったんだ、アイツは？」

2人は消えたあの戦士のことを考えるが、それを解消する一言があった。それは、

「祝え！何ものにも負けぬ赤き鎧を身に纏い。ノイズを駆逐し、新たな世界へ我らを導く！イル・サルバトーレ！その名も仮面ライダーゲイツリバイブ 剛烈！我が救世主の新たな歴史が始まる瞬間である！」

そうW O Z 兄貴である。殆ど出番はなかったがちやっかり生きていたのだった。

これで奏者と我が救世主の始まりの話は終わりである。この後は、

W O Z 兄貴は奏者達に連行され2課と呼ばれる場所で尋問を受けた。ゲイツリバイブについて各国が我先にと調べようとしていたがそれはまあ関係ない話だろう。

……そして、それから1年の月日が流れる。早い？気のせいだよ。数々の騒動の中心となった我が救世主は、

「おかわり！」

「はいよ。そんなに慌ててもご飯は逃げ無いよ。」

「すみません。いつも響が。」

「大丈夫！ご飯くらいならいつでも作ってあげるよ。一応時計屋なんだけどね。はっはっは……ガツ！」

「うわあ！血を吐いちやった！だっ大丈夫ですか（汗）」

女の子にご飯を作っていた。……どゆこと？

（原作主人公と仲良くなりました。はは！ってか、昨日のノイズとの戦闘のせいで全身ボロボロでヤバイ。デメリットが治らないんです。がどうゆう了見なんですかねえ）

# 設定2068

## 人物紹介

### 1. 主人公

年齢：19歳（開始時点18歳）

・仮面ライダー玩具を買いに行く途中に車にど突かれて死んだ人。実は神様の間違いらしくて咄嗟に誤魔化すために死んだ直前の状態で転生された為、本当に説明も何もなくこの世界にきた模様。説明も無く転生特典を使えるくらいには適応力は高い。現在は転生特典の時計屋「タイムジャッカー」を経営している。特典は、

1. ゲイツリバイブに変身できる能力（デメリット付き）
2. OTONAREベルの回復力（デメリットのダメージ方が高い模様）

3. この世界で一生困らない程度の財源（時計屋）

4. （どんなに嫌でも絶対）物語に関われる権利

この4つである。なお本人には転生特典の説明はないので、急に異世界にいて訳も分からず戦って、気づいたら持ってた住所書いた紙で訳も分からず時計屋を切り盛りしてたりする。……それでも幸せだからOKです。

### 2. 天羽奏

年齢：17（開始時点16歳）

・性格も過去なども原作基準であるが、カルマノイズの呪いとゲイツリバイブへの強さの渴望せいで少しノイズを殲滅したいと言う復讐心が大きくなっている。この1年の間に風鳴翼と「ツヴァイウイング」を結成し大ブレイクして、少し落ち着いてる模様。ゲイツリバイブの影響で変わった点は、

1. ノイズへの復讐心倍増
2. 訓練による適合率の上昇
3. カルマノイズの呪いによる疑似的な■■■■■■■■■■の

発動

この3つである。因みに作者と主人公の最推しである。

### 3. 風鳴翼

年齢：16歳（開始時点15歳）

・まだOTOMEな時代の翼さん。まださきもり系女子である。  
（進化すると防人↓SAKIMORIになる模様）ゲイツリバイブの最後の攻防で誰かの為に盾になる覚悟が少し出来たので原作に比べると少し覚醒が早まる可能性あり。奏と「ツヴァイウイング」を結成しており、少し危険な感じのする奏を支え守ろうとする。ゲイツリバイブの影響は少し覚悟強くなるくらいである。

### 4. W O Z 兄貴

年齢25（開始時点24歳）

・ご存知我らが救世主を祝う人。本来なら死ぬ筈の未来を我が救世主が救い出した事により、生存+心酔する。この世界に我が救世主の活躍を広める為に行動する。世界中のノイズの出現情報を探しどんな場所でも現れ我が救世主を祝う為に世界中の人から「救世主の家臣」として知られている。因みに自分以外が我が救世主を祝うものならばチギレ必須の限界オタクである。

### 5. ■■■■

年齢：3（開始時点8歳）

・何■■■なか■■■が救■■■の■路。■■■■■界も■■■しか守れ■■■の■■■の■■■。■■■類は生きているが■■■そのものが死に■■■は■■■。一見平和に見えるがそこはただ■■■  
■■■。何も■■■ず何も■■■ないただ■■■■■■様な穏やかな世界。そこにただ■■■■■■を■■■続ける。いつか■■■■■■として。

### 色んな設定

#### 1. ゲイツリバイブライドウォッチ

・主人公に付いてきた転生特典の一つ。ノイズの出現を察知して自動的に音声で鳴りベルトを装着する。コレが無いとベルト出現はも

もちろん変身も出来ないが、遠くに投げても敵に奪われても自動的に主人公のポケットに戻ってくる呪いの装備である。

## 2. ジクウドライバー

・ゲイツリバイブライドウオッチによって呼び出された変身アイテム。最初からゲイツライドウオッチが刺さってる状態で出現するが、リバイブライドウオッチを刺さない限り変身が絶対に出来ない仕様になっている。これにより主人公はどんなに嫌でもゲイツリバイブにしか変身出来なくなっている。

## 3. 仮面ライダーゲイツリバイブ

### 剛列

・主人公が変身した姿。圧倒的な防御力で敵の攻撃を弾いて吹き飛ばす。主人公がよく使うフォームである。その防御力はこの世界に存在する全ての攻撃でもまともなダメージを与えられないほどで、時間を引き伸ばす事によってパワードのこ当たる時間を伸ばしてダメージを与えたり、受けるダメージを分散したりする。デメリットとして身体全体がボロボトになるので長時間の戦闘はできない模様。

### 疾風

・主人公が滅多に使わないフォーム。時間を圧縮する事で圧倒的スピードで敵を翻弄したり国から国に移動したりと出来るが防御力が激減してデメリットが剛列よりも強くなるので本当にピンチの時以外は使用は控えてる模様。その気になればフリーズにすら対応できる速度で動く事も出来るが、したら最後全身の肉と骨が粉々になるとだろう。

### デメリットについて

・主人公は変身するたびに身体が傷ついていく。これはどれだけ鍛えても軽減とかはしない模様。故に長時間の変身は不可能で連続変身は日に3回以上は危険である。具体的に言うと、

15分以下↓身体から血が出て、全身筋肉痛になる程度。

30分くらい↓内側の筋肉やらが壊死したりする。血を吐いたりする。

45分くらい↓身体中がボロボロになり動く事すらできなくなり、

最悪死ぬ可能性がある。

小話「逃げた後の話」

「がつ……あああ、いってえ……」

草木も眠る丑三つ時。公園のベンチで横たわる1人の男がいた。男の身体は血塗れで特に両手と右足の損傷が酷くダラーンと垂れており動かす事すらままならそうだ。

「公園に戻ってきたのは良いけど……くっ、行く当てもなければどうしようも無い。本当にどうすりや良いんだよお。」

ピンチのピンチの連続でこんな時にウルトラマン来てくれないかなあ。と考えてる先程まで仮面ライダーやつてた人の凶。そんな時に、

「ヤベエ、意識が朦朧とし……ってえ！何！いま死にかけてる奴の腕になんか刺してきた奴は。こちとらマジでやばいのになって、紙？」

急に腕に紙が突き刺さり切れながら紙を取ると一言、

『ここから真つ直ぐ行つて3個目の信号がある場所を左折しろ。』

と言う文と裏側にご丁寧に地図も描かれてあった。そしてそれを見た主人公は、

「なにこれ？いらね。」

ポイっと投げ捨てた。いや、まあ訳も分からない手紙が届いても無視するよね。投げ捨てそのままベンチに横たわろうとしたが、

「あれ？いった！身体が勝手になって……痛いイタイ！身体勝手になんか歩き出して……がああ！折れる折れる。ただでさえキックでボロボロの足が完全に碎ける！」

なんか身体が勝手に動いて前に進んでいく。そのまま歩いて地図に描かれていた場所に着いた。そこはお店のようで看板には「タイムジャッカー」と書いてある。そしてその店に入ろうと手を、

「ぎゃあああああ！上がらない上がらない。手が折れてるから上がらないって！ドア開ける力もないって、あがああああ………」

折れた手を無理やり動かされて痛みで意識が飛んだそうさ。次に

目が醒めたら手のボロボロが多少治っていて、地域の人からまるで最初からそこに居たような扱いを受けて困惑したが、帰れそうに無いからこのままでもいいかなと思った。そうして彼は神から授かった（無理やり渡された）家に住み着く事になった。そこから1年間ノイズと戦ったり、時計屋なのに家電製品ばっか直したり、中学生の女の子が家に入り浸るようになるのはまた別の話である。

「ふう、今日も変わらず良い天気だな。」

そこは小さな町の片隅にある時計屋。看板の文字はかすれ、「タイ  
：■ヤ■■ー」となり店自体とそこそこにボロボロになっている。  
やって無い様にも見えるが一応営業はしているそうだ。まあ、この世  
界で時計は必要ないものだが。

「今日は、7月26日か。いつも通り何も無いといいんだけどなあ。」

男はカレンダーを見ながらぼやく。この店は趣味でやっている様  
なものでいつも通りならほとんど人が来ない。この日を除いて、

「……そろそろか。」

男は店を出る。扉を開けた先に居たのは、大量の戦車や戦闘ヘリな  
どの兵器や兵士達。その先頭にいるのは若い少女達だった。

「やれやれ、これはまた大勢で店に来られて。いらっしやい。何が壊  
れたんだい？」

朗らかに笑う男と対象的に少女達は決意に満ちた顔であった。

「壊れた世界を直しにきました。貴方を倒しに。」

真ん中の少女が口を開く。

「流石にそんな物は直せないなあ。それに壊れたって言うけど何処  
が壊れてるんだ？こんなにも平和な世界が。争いも無く、穏やかな日  
常が続く世界。こんなにも平和なまるで……」時が止まった様な平和  
な世界。「そう、それぞれ。」

「だからですよ。誰も違和感を感じず当たり前前の様に平和を謳歌して  
る。2068年から一切進まない事対して。そしてその原因は■  
■■■■■■。「偽善の救世主」である貴方のせいだって。このデー  
タが無ければ私達も気づかなかった。そして今私達は揃えられる戦  
力を持って貴方を倒しに来ました。時間を進める為に。」

少女達はそれぞれの歌を奏でる。少女達を光が包みスーツを纏い  
武器を構える。

「……やれやれ、アメノハバキりにイチイバル。奥の子は魂を狩るイ

ガリマにシウルシャガナ。アガートラム、シンショウジンに完全聖遺物のネフシュタン。おいおい錬金術師のファウストローブまであるのか。何個かは壊れて無くなった筈じゃなかったけ？」

「データに入っていた復元技術とこの世界に残存する錬金術師の力を総てを使い復元しました。そしてこれが……！」

最後に真ん中の少女が歌う。スーツを纏い右拳に槍の様なウエポンが装備される。

「ガングニールか……。」

「ええ、この神を殺す槍で貴方を偽りの救世主……貴方を倒します。」

少女達が臨戦態勢にはいる。しかし男は何もせずただ立っている。

「やれー！」

少女の号令に戦車やヘリから一切に攻撃が始まる。さらにミサイルまで飛び交い男と店を吹き飛ばした。しかし、

「……変身……」

爆風が急に晴れる。その中心には鎧を纏った戦士が現れる。錆びてしまった様な赤褐色の鎧に薄汚れた金色『らいだー』の文字が光る。

「無駄だ。お前達ではこの世界は救えない。」

「……っ、全員戦闘準備！あいつを倒します！」

少女達の号令と共に全部隊が突撃するが、

「ふん。」

戦士が手を振り抜く。その瞬間振り抜いた先の戦車や戦闘ヘリが総て爆発を起こした。その近くにいたシウルシャガナの少女の腕が消し飛ばす。

「このおー！」

やられたのを見てイガリマとアメノハバキリの少女とが責めてくるが。

「無駄だと言っている。」

総ての攻撃を避ける事もなく受け止めて拳を突き出す。聖遺物ごと少女達の身体を貫き投げ飛ばす。そこに腕を振り抜き追い打ちをかける。

「危ない！」

アガートラムとネフシユタンの鎧を纏う少女達が助ける為に盾となる。凄まじい衝撃波を防こうと力を発動した。一瞬だけ拮抗するが、すぐに衝撃波に飲まれる。その場には塵すら残らなかつた。再生能力を持つネフシユタンの鎧を纏った少女も一瞬で消し飛ばされこの世から消える。

「だったらー！」

シンシヨウジンとイチイバルの少女とファウストローブを纏った少女が遠距離からミサイルやレーザー、錬金術で遠くから攻めるが、「遠くからなら大丈夫とでも?」

戦士の身体がブレる。そしてイチイバルの少女達の前に現れる。その姿は変わっており黒く淀んだ青い翼を広げていた。そしてそのまま少女達を横切る。すぐに戦士を狙おうその方向を向くが、  
ーゴトン。

そんな音と共に少女達の首が落ちた。そしてそのまま地に倒れ伏す。そんな少女達に目もくれず青き翼が飛ぶ。へりも戦士も縦や横に真つ二つに分かれていく。兵士達はそれでも決死に戦おうとするが、身体を切られたり消し飛ばされたり数を減らしていき最後には、「嘘でしょ……。」

ガングニールを纏った少女だけになった。万を超えるであろう数の味方は数分もしない内に彼女一人だけになってしまった。

「分かったか?お前達ではこの世界を救うどころか、俺すら倒せない。」

「うるさい!私達は世界を救う!」

少女の手から金色のオーラが噴出する。

「世界を救うね……。もうどうしようも無いものなのに救えるわけないだろ。」

戦士から赤と青のオーラが吹き上がる。

「ハアアアアア!」

少女の突貫に戦士は拳を突き出す。巨大な衝撃が吹き上がり立っていたのは戦士一人。そこに少女の姿は無かつた。

「やれやれ、これでまた始まるのか……。」

そう眩くと店を開ける準備をしに男は店に入っていく。先程までの争いはまるで無かったかの様に総てが消えていく。そして1日が始まる。何も無い平和な1日が。

今日の日付は3月1日……。

## 預言者の『祝え』2040

「我が……救世主、ゲイツリバイブ……」

とある街の商店街。電化製品や家具。パン屋さんや肉屋などの色々なお店が並び賑やかな喧騒が聞こえる。そこに1人の男がぶつくさ何かを言いながら歩いていく。男は元は身なりの良い服装だったのだろう。しかし、全身炭やホコリだらけで服も所々破けており小汚くなっていた。

「ダメだ……、駄目だだめだ！」

男は立ち止まり悲痛な声を上げる。その姿を見た人殆どの人は急に叫んだ男から離れようとした。一部の人はそんな声を上げるほど酷い目にあってしまったのだろうと同情の様な目線を当てていた。さて、他の人から見るとそこまで酷いが当の本人の悩みは、

(我が救世主に対する祝いの言葉が出てこない！)

……至極どうでもいい事だった。いや、本人からすれば重大な事なのだろう。彼の名前は『宇緒頭洋輔(うおずようすけ)』彼は2日前に人生最大の窮地に立たされた。仕事から帰る際に鳴り響くノイズ出現の警報。我先にと逃げ出す人々に足を取られて転倒してしまった。迫りくるノイズの恐怖に25歳の男なのにみっともなく泣き叫びながら助けを求めた。しかし誰も救おうとはせずむしろ都合が良いと見捨てられて、絶望していた彼を救いだした者がいた。ノイズ共を容赦なく葬り数分もしない内に全てのノイズを倒した、赤い鎧を身に纏う剛烈なる戦士その名も仮面ライダーゲイツリバイブ。……あれ、この文章彼の祝え語録に入れれるのでは？

「……剛烈なる戦士、これを基に考えれば行けるのでは。」

と、まあゲイツリバイブに救い出された結果。ゲイツリバイブの事を我が救世主と呼ぶようになり、彼が現れた事を祝うことが私の仕事だと思ふようになったのだ。そんな感じでかれこれ2日ほど家に帰らず色々な場所を歩き回りながら祝いの言葉を考え続けているのだ。……いや、家には帰れよ。

「それにしても、我が救世主は一体どこに行ってしまったのだ？あ

れから2日程探しているが……、ツ！」

彼（以下W O Z兄貴）が再び立ち止まり考えようとするや突然緊急アラートが鳴り響いた。その発生に先程まで賑やかだった商店街は騒然となり、そこにいた人々はすぐ様避難シェルターに向かって走り出す。しかしW O Z兄貴は

「これは……、ノイズ発生時のアラート。と言う事なら我が救世主も！」

そう言い出すと逃げ惑う人々を逆走する様に前に走り出した。大勢の人々の間をすり抜けたり飛び越えたりして……、無駄に身体能力たけえ！

（我が救世主はノイズが出現した時に私の前に来てくださった。ならば、ノイズがいるところに我が救世主も……）

考えながら走っているとノイズの発生場所についた。そこにはまだ逃げ惑う人々がいて。阿鼻叫喚の地獄の様になっている。その場で2人の少女が居た。少女達は他の逃げ惑う人々の中でへたり込んでいる。恐怖で足がすくんでしまっているのだろう。

「切ちゃん……」「調……」

お互いに身体を抱き合う少女達を狙い槍の様に身体を変形し飛んでくるノイズ。

「危ない！」

2人を助けようと走るが、ノイズの姿を見て2日前の自分を思い出し身体が上手く動かない。そんな状態でノイズ達の速度には全く敵うわけもなく2人を文字通りの凶槍となったノイズ達が刺し貫かんと迫る。

（ダメだ！間に合わない。）

W O Z兄貴は2人の惨劇を見ない様にと目をつぶる。少女達も目をつぶる。その瞬間だった。

ス……ドタ……ム

耳に微かな音声と何かを切る様な斬撃音、そして何かがぶつかり合う音が聞こえた。W O Z兄貴はその音声を聞きそちらの方を向くそこには、

「我が救世主!!？」

赤き鎧を身に纏う戦士『ゲイツリバイブ（以下ゲイツ）』がパワードのこを使いノイズ達の進行を止めていた。

「ふんー！」

ゲイツが力を込めるとのこが回転しそのままノイズ達を押し飛ばす。ノイズ達は先程まで突撃していた方向と真逆の方に吹き飛ばされた。

「えっ。」「おっよよ。」

死なら窮地から救い出され2人の少女達は声が出せない。少女達の無事を確認する様に後ろを少しだけ見てノイズ達の大群に突撃する。ノイズ達はゲイツに向けて殺到する。ゲイツはパワードのこを回転させながら自らも回転する。その瞬間ノイズがいた空間に亀裂がはしる。亀裂の入った空間を戻そうと空気が流れこむ。その空気に巻き込まれ近づいたノイズをゲイツはパワードのこで更に切り碎く。怪力無双と言わんばかりに力を使う。

「流石は我が救世主！あの程度のノイズの群れでは話にもならないよ。うだ。しかし、少女達を守ろうとして時折動きが止まっているな。ならば私がすることは……。」

WOZ兄貴はその姿に魅せられながらも自分が我が救世主にできる事を探し出し少女達の保護に当たる。少女達に近くために全力でノイズ達のいる場所に走る。近づく人間を殺そうとノイズが迫るがWOZ兄貴は臆する事なく前に進む。何故なら、

「はあー！」

我が救世主が己を助けてくれる事を信じているからだ。近づいたノイズが目の前で吹き飛んでいくのを見ながらWOZ兄貴は前へと進んでいく。そして惚けている少女達を俵運ぶように持ち上げ、そのままノイズ達から全力で離れる。

「我が救世主！少女達は私に任せてくれたまえ。だからその力を思い切り使ってください！」

WOZ兄貴の声に頷きゲイツはパワードの出力を更に高める。この回転速度は更に速くなり巨大な火輪を生産する。

のこ切斬！

音声と共に振り抜かれた一撃は全てのノイズ身体を抉りちぎる。その部分だけ乱雑に消されたように上半身と下半身に分けられたノイズ達は数秒の沈黙の後全て爆発しこの世から消えた。ノイズ達がいなくなつたのを確認したゲイツはこの場から去ろうとする。

「待つてくれたまえ！我が救世主！」

WOZ兄貴の呼びかけにゲイツは立ち止まるもすぐに歩き始めた。男はすぐ様追いかけるもボロボロになった看板が目の前に落ちその一瞬で消えてしまった。

（また消えてしまった。しかし、これで確信できた。やはり我が救世主はノイズ達が出てきた時に現れる。ノイズ達を倒し我らを救う英雄！支えなければならぬ！）

若干変な感じでトリップ仕掛けてるWOZ兄貴に声が聞こえてきた。

「さっきの奴はなんだったんだ。」「ノイズ達が倒された？」「でもノイズって人じゃ倒せないだろう。」「じゃあ政府が嘘でもついていたのか？」「と言うかあの鎧の男は俺たちの……」

「……味方なのか？……」

それは先程までノイズ達の襲われ奇跡的に一命を取り止めた人達だった。先程まで自分達を殺そうとしていたノイズ達を一方的にねじ伏せた戦士に恐怖などの懐疑的な視線を向けていた。その力をいつかこちらに向けてこないかなどの不安が彼らをよぎろうとした瞬間、

間、  
祝え！

WOZ兄貴の声に全員が注目する。ボロボロの服でありながらも威風堂々と積み上げられた炭の山の頂上に立っている。WOZ兄貴は彼らの視線がこちらに注がれたのを感じ高らかに語る。

「全世界の何者を凌駕し、時空を超えて世界の巨悪を駆逐する剛烈なる戦士！イル・サルバトーレ！その名も仮面ライダーゲイツリバイブ  
剛烈！また新たな巨悪を滅ぼし我ら導いた瞬間である。」

WOZ兄貴の言葉ははたから聞けば何をいきなり言い出したんだ

コイツはと思われる様な言葉。しかしその言葉には説明できない力を感じた。W O Z 兄貴の言葉に彼らは賛同し始める。意味は良く分からない。それでもあのお方は我らをお救いくださる救世主なんだと。そう！今ココに『我が救世主を祝う会』がこの地に発足した瞬間なのである！……どうしてこうなった。

「あれがセレナが言った。」「ゲイツリバイブ……。」

そんな馬鹿騒ぎの中、少女達の所に近く者が居た。

「あれがゲイツリバイブ……、確かにその力は正しく救世主だ。……そう、それだけだかね。」

白髪の髪を揺らしながら薄気味悪い笑みを浮かべ歩いてくる者にW O Z 兄貴は声をかける。

「誰だね君は？」

「僕の名前はD r. ウエル。いずれ英雄になる男さ。」

「英雄に？」

「そうさ！救世主……ゲイツリバイブウ。僕はそれすら超える英雄になる男だあ！」

これがこの世界での救世主の臣下と英雄を目指す者の初めての出会いだった。この男達の出会いが後の歴史に大きな変革をもたらすのはまた別の話である。

……なんやかんや1年が過ぎてW O Z 兄貴は高空挺の中に居た。服装は初めて祝った時と変わらずボロボロな服装に『救世主降誕暦』と書かれた本を持っている。

「ウエル。今回のノイズ出現地点はどこかい？」

「ええ、そうですよ。ほら噂をすれば救世主様の降臨だ。いつも通り近くで降ろしてあげますのでさっさとやってきたら如何ですか。」

「そうだね。では早速。」

その言葉と同時に彼は飛行艇から飛び降りる。目測でも15メートル以上下の場所に何事もなくと着地する。そこにはノイズ達の大群とそれ倒す我が救世主の姿。その姿に見惚れる兵士達に今日も高らかに叫ぶ！

「祝え！」

## 陽だまりと救世主の太陽2000

「はい、どうぞ。」

「まあ、本当に直ってる！ありがとうございますね。」

お婆ちゃんの手には青年からラジカセが渡される。ラジカセはだいぶ古く年季が入った物だが、そこから流れる天気予報がこのラジカセが動いている事を教えてくれている。

「色々回ったんだけど、数十年前の物だからもう無理だって言われてどうしようかと思ってたのよ。お爺さんの形見だったから。」

「確かに古い物でしたけど、損傷部分もそんなになかったから少し部品を取り替えるだけで十分だったよ。きつとお婆ちゃんが大切にしていたからだね。」

道具を戻しながら青年が答えるとお婆ちゃんは微笑み、

「本当にありがとうございますね。また壊れたらお願いしますね。優しい修理屋さん。」

と言いながらお店を出て行く。

「ありがとうございます。壊れたらまた直しますね。」

お店から出て行くお婆ちゃんを青年は見送る。

「……うち、時計屋なんだけどなあ。」

出て行くのを確認した後に青年がぼやく。ここは時計屋「タイムジャツカー」。1971年から続くそれなりに長く続く時計屋で壁一面に色んな時計が並んでいるお店だ。……と言うのがこの店の「設定」である。

「この店に住んでもう一週間もたったか……。はあ〜っ！いてえ〜。」  
青年はため息を吐きながら長袖の下に巻いてある包帯をさする。青年の服の裏には大量の血の滲んだ包帯が巻かれていて、もしも服を脱いだら出来の悪いミイラのコスプレと呼ばれていい風貌になっている。

「一週間も夢を見続ける訳ないだろうし、これは本当に転生なり転移なりパティーンだろうなあ。」

痛む身体で店内の掃除をしながらカレンダーを見て再度ため息を

吐く青年。側から聞くと変な妄言にしか聞こえないがこの青年は一回死んでこの世界に來たいいわゆる転生者である。当の本人は余り憶えていないが彼はとある神様の失敗を誤魔化す為にこの世界に転生させられた可愛そうな被害者なのである。

「と言うか訳も分からず時計屋やってるけど、おかしくない？と言うか時計屋なのに時計以外の物ばっか直してるんですけど。うちは時計屋なんだけど。」

この時計屋も転生特典であり、青年の住む住居になっている。時計屋としての設定があるのに持ち込まれる物はラジオだったり冷蔵庫、DVD、挙げ句の果てには車だったり時計と関係無いものばかりの修理を頼まれるので青年としては「時計屋じゃなくて修理屋って名乗るべきでは？」と考えてたりする。

「さてさて、掃除も終わったからそろそろ昼飯にでも…『ゲイツリバイブ』…えっ、まじで今からいくの?」

一息を着こうとした青年に突如音声が聞こえたと思ったらベルトが巻かれている。

「んー、少し休憩してからでも『ゲイツリバイブ』…ほら飯を食べなきゃ戦は出来ないって『ゲイツリバイブ』…3分でいいか『ゲイツリバイブ』わかったよ！行きや良いんだろう！」

ベルトに対して何かぶつくさ言い訳をして、急にキレ出す青年。イライラしながらベルトに砂時計の様な物をさし、  
「変身ー」

そう叫びながら店の裏側から飛び出した。

-----

穏やかな昼ごろから地獄へと一変した街中。ノイズの出現により人々は戸惑い、恐怖し逃げ出した。既に何人かは炭となり辺りに黒い粉となり散っている。その中に1人の少女がいた。

「未来ーどこに行ったの……。」

彼女は友達の名前を叫びながら濁流の様ね人の波を掻き分けて歩

いている。彼女は友達の未来と言う少女と共にシヨツピングに出掛けていた時にたまたまノイズ発生の警報が鳴り響き、逃げ惑う人の波に呑まれ別れ別れになってしまった。

「もう、避難したのかなあ？でも取り残されたらしてたら大変だし……」「きやああああ!!？」この声つて、未来！」

未来の叫び声。少女はその声を頼りに走り抜けると、

「いやあ！来ないでえ！」

黒髪の少女をノイズが囲んでいた。ジリジリとにじり寄ってくるノイズ達に

腰を抜かして必死に逃げようとする。

「未来！」

そう叫び未来に近寄ろうとするも全方位をノイズに囲まれて何も出来ない状態であった。

「響！響だけでも逃げて！」

未来も彼女に気づき自分のことは良いと彼女に立花響に逃げる様に言う。そんな少女をノイズ達は殺そうと動き出す。

「ダメ！未来！」

響は未来に向けて必死に手を伸ばす。未来もそれに気づき手を伸ばすがノイズはそんな彼女達を嘲笑うかの如く、飛び出し槍の様に尖った身体を射出する。彼女達の伸ばした手に刺さろうとした瞬間、  
ブウン

一瞬なにか風を切る様な音がした。音と同時にその場にいたノイズはまるで最初からそこに何もなかったかの様に全て消滅していた。そして消えたと同時に未来の隣に誰かがいた。

「……へえ？」

余りにも唐突な出来事に響と未来も呆然としていた。それはそうだろう先程まで確実に死んでしまうと言う状況が一瞬で覆されたのだから。

「……ッ、大丈夫か。」

「えっ」

未来は声をかけられた方を向く、そこに立っていたのは青い鎧を

纏った戦士だった。翼の様に展開した軽装の鎧に爪の様な武器。そして顔にはデカデカの『らいだー』と書かれている。余りにも奇妙な出立に未来は少し固まってしまった。

「……だから大丈夫かどうか聞いているのだが？」

「えっ、あ、はい。大丈夫です。」

「そうか、ならもう少しだけここに居るといい。こちら辺のノイズはあらかた倒したからな。」

戦士は未来の安否を確認すると、人々の悲鳴が聞こえる方向に動き出した。

「あのー！」

響が戦士を呼び止める。戦士は立ち止まり響の方を向く。

「未来を、私の友達を助けてくれてありがとうございます。」

頭を下げお礼をする響。次に前を見ると戦士はその場にはいなかった。

「いなくなっちゃった。……そうだ！未来、大丈夫？」

「うん、私は大丈夫。けどあの人は誰なんだろう。」

「なんだか分からなかったけど、きっと良い人だよ。」

自分達を助けてくれた戦士について考えていると、

「祝えー！」

突然の叫び声。振り返るとボロボロのフードの様な服、右手に「救世主降誕暦」と書かれた本を持った男が現れた。

「ノイズなど物ともしない剛腕、重装甲の赤き勇者、その名も仮面ライダーゲイツリバイブ剛烈！今まさに、その赤き肉体とあらゆる障害を世界ごと切り裂く回転刃による正義執行、そして我らが語り継ぐべき救済譚を新たに一ページ増やした瞬間である！」

男は少女達の周りをグルグルしながら祝いの言葉？らしき物を語っている。

「えっと、……その、あの。」

「響、駄目だよ。変な人に関わったらいけないって。」

その姿を見た響と未来はドン引き状態である。男性はその視線に気付いたようだが気にも留めずに、

「おっと、我が救世主への祝いに夢中で自己紹介がまだだったね。私はウオズ。我が救世主の素晴らしき世間に広めるために行動する。しがない元会社員さ。」

自己紹介を始めた。……メンタル強いなあ。そんな男性を前に少女達はますます引いていく。なんなら後ろに数歩ぐらい下がってるまでである。そうやってゆっくりと変な男性から逃げようとしていた時、

「赤き勇者？」

響がウオズの言葉に疑問符を浮かべる。

「ああ、いい祝いの言葉だったろう。これは我が「救世主を祝う会」の会員NO.0003大日小進が考えてくれた祝いの言葉だ。我が救世主に似合う良い言葉だろ。特にあらゆる障害を世界ごと切り裂くと言う部分。我が救世主の前には世界であろうと叶うまいと言った力強さを感じる。私としてもこの言葉言いたいと思ってしまった程にこの言葉は……「青かったですよ。」…は？」

響が言った一言にウオズは固まる。

「えつと、大丈夫で「詳しく聞かせてくれないか？」えつ、えつ、あのその。」

固まったウオズに心配し声をかけようとした響にウオズ肩を掴む。

その目は狂気的な程見開いていた。

「えくつと青くて、翼？みたいな物がついていて……、手に何か持ってたような。」

曖昧に答える響の肩を強く握りながらウオズは聞いている。

「それで、他にどんな特徴があったのかい？より詳細に、より明確に！我が救世主の新たな姿を……「あの、ちよつとそこの君？」なんだい？私は今忙しいのだが？」

後ろから声をかけられウオズが後ろを振り返るとそこには警察官がいた。

「君ね、ちよつと署まで来てもらおうか。」

「何をする、離せ、HANASE！私には我が救世主の新たな姿の祝いの言葉を考えなければならぬんだ。だからその手を離したまえ。」

「ハイハイ、言い訳は後で署でいくらでも聞いてあげるからね。」

ウオズは警察官に捕まれそのまま警察署に連れて行かれた。……そりやそうだ。女子中学生の肩を掴んでいるボロボロの服装の男。側から見たらどう見てもロリコン案件だもん。

「……帰ろっか、響。」

「……そうだね。」

さつきから怒涛の展開に少女達は思考を放棄して、とりあえずこの場から離れることにした。

—————

少女達の受難？の数分前くらい。

主人公 s i d e

減らねえ、へらねえよ！何じゃあこのノイズの量は。

「ウェーイー！（owo）」

青い一条の光がノイズ達を通り過ぎる。後から響く意味不明な掛け声と共に爆散していくノイズ。ヒヤッハー、その命神に返しやがれ！……って、まだまだいるじゃないですかーヤダー。

この世界に来てそろそろ1週間が越えようとしている土曜日。皆様どうお過ごしですか。……私ですか？そうですね、ノイズ達をこの世からぶつ飛ばす慈善事業を行なっております。1週間ぶつ続けで。ツライ！

「セイヤーー！」

ノイズ共の群れにスピードクローを全力でスパークングしてもまだだいるし、ノイズの量おかしくない？少なくとも100は軽く消しとぼしてはまずなんですがねえ……って、背後から殺気！フン、バカメ。その程度の攻撃華麗によけてカウンター喰らわしてやんよ！

「イツテイイヨー……ガッ！」

綺麗な回し蹴りが炸裂！ノイズ選手の鳩尾に決まった！ノイズに鳩尾あるか知らんけど。それと同時に内側から何が吹き出る音と流れる何か。ペロ、ハッ！これは血！

「ガッハー！ウオエ……ハアハア。」

内側から破裂するような感触と激痛が身体をかけめぐらう！……ふぎけてる余裕ねえわ。激痛で意識飛びそうだし、身体も動かし辛くなってきたし。本気でどうにかしなきゃ三途の川をバタフライアウェイしなきゃならん。

「ハアアアア、ハッア！」

超高速で動いて分身しながらノイズ達を切り裂いていく。時間的には0.1秒にも満たないだろうけど、数百数千の斬撃でドーム状にノイズを囲む。後は時間が経つとあら不思議。ノイズは綺麗さっぱりいなくなりましたとき。めでたしめでたし。はよ変身解除しよ。

「……はやく、家に帰るか、ウオエツ。」

変身解除してから急に身体重くなる。ここから自分の家までおよそ1km。そこまでたどり着けるのかすら怪しいべ。それでも俺には帰りたい家があるから！（エリート帰宅部感）

「ハア、ハア、……しんどい。」

あゝるこう♪あゝるこう♪。私は瀕死♪歩くと軋む（骨の音）♪どんどん逝こう。……やべえ、意識飛びそう。変な歌考えてないとパトラッシュしそうなんですけど。もう少しでいいから持つてくれないかなあ俺の身体。

「もう……少し、「どいてえく!!?」へえ、」

上から声が、エリック！上だ！見上げてみるとシマ縞のパン……

「ツーン!?」

「うーんと、って大丈夫ですか！」

星が、星が見えたよスター……

く主人公sideエンドく

只今、立花響は焦っていた。

「あわわわわ、どっとうしようく!?」

目の前に倒れている青年をどうすればいいか盛大に焦っていた。

「えっと、大丈夫ですか。意識はありますか？無かったら返事してください……意識が無かったら返事出来ないよ！えっと、どうしよ

う。」

焦り過ぎてトンチンカンな事を言ってしまったているが、無理もない。この青年が倒れてる理由には少なからず立花響も関係しているのだから。

時間を少し遡ろう。響と未来は先程起きたノイズ発生からウオズと名乗る不審者などの事象により、だいぶ疲弊していた。

「私、飲み物買ってくるね。響は疲れてるだろうから少し休んでて。」  
自分も疲れているだろうに未来が気を利かせて飲み物を買に行ったのだ。そこで響はお言葉に甘えて休んでいると。小さな女の子が近くで泣いているのを見つけた。響が気になって少女にどうしたの?と聞くと、

「お気に入りの帽子が風に飛ばされて木に引つかかたの。」

そう言つて、近くの木に指差すとその木よ枝に帽子が引つかかっていた。少女の泣いている姿を見て、いてもたってもいられず、

「よし、お姉ちゃんがとってきてあげる。」

そう言つて、木に登ったのだった。すると木を登り枝に引つかかった帽子を取つて下にいる少女に渡すと、

「お姉ちゃん!ありがとうございます!」

そう言つて、少女はおじきしながら向こうに走つていった。よかつたなと思いつつ木を降りようとすると、運の悪いことに突風が起こつたのだ。降りようと木の上に立った時だった為にバランスを崩してあわや転落!そんな時に歩いている青年の頭の上にお尻から着地したのだった。そのお陰か、響は無傷で済み青年は気絶してしまつたのだった。

「あわわわわ、このままじゃ私、警察に捕まっちゃうよ〜!」

時間を戻して、現在。響の焦りは限界を超えそうだった。

「響く。どうしたの?」つて、男の人が倒れてる!」

そこに帰ってきた今の現状に驚く未来。

「み、未来!?……わたし、私は悪くないんだよ、たまたま私の目の前にこの倒れた人がいて、それで。」

未来が来たことにより更に焦りだし、もはや火曜サスペンスの犯人

くらしい挙動がおかしくなり始めた響。

「落ち着いて、響！今は倒れてる人が優先だよ！とりあえずあそこのベンチに寝かして、それから……。」

「う、うん。わかったよ。」

未来の的確な指示により落ち着きをひとまず取り戻した響。すぐ様、青年を近くのベンチに寝かして、頭に水で濡らしたハンカチをつけたりなどを行った。

……数分後

「……う、うくん。ここは？」

青年は目が覚めた。

「よ、よかつた。」

響と未来は目が覚めあ青年を見て安堵で腰を抜かす。

「うくと、君たちは？」

「あつ、忘れてた。ご、ごめんなさ〜い!?!?」

響の謝罪と今の状況を教えられた青年は、

「あはは、気にしなくて良いよ。俺も疲れてて周りを気にして無かつたし。」

「本当にごめんな……。」

ぐぐぐ

響のお腹から大きな音が聞こえた。先程のバタつきと安堵からお腹の虫が鳴いてようだった。

「えっと、これは、その……。」

「お腹空いたのかい？だったら、ご飯作ってあげるよ。家、すぐそこだし。助けて貰ったお礼にね。」

「えっ、そんないいですよ!?!?そもそも悪いのは私だし。」

「助けてくれたのは事実だし。そちらのお嬢さんは関係ないのに手伝ってくれたんだから。これくらいはさせてくれ。」

「えっと、それじゃあお言葉に甘えて。」

少女達を連れて青年は自分の家に入っていく。今回限りのお礼のつもりだったのだが、これがこの少女達、この世界の主人公達との長い付き合いになるとは、青年は予想していなかった。

（1年後）

時計屋「タイムジャッカー」は賑やか喧騒に包まれていた。

「常磐さんのご飯だ！早く♪早く♪」

「もう、響。はしたないよ。」

2人の少女が椅子に座っている。

「はい、お待たせ。」

奥から青年が料理を運んできて、食卓に並べる。

「うつわはー♪ご飯だー！いっただきまーす！」

「だから、響ってば。服についちゃうよー。」

響の急いでガツガツ食べるのを諫める未来。

「二人とも、今日も仲良いね……イタタ。」

「常磐さん。大丈夫ですか？お身体弱いんですから気をつけてくださいよ。」

それ見ながら笑う青年笑ったのが身体にきたのか手を抑えるとそれを心配する未来。これが、この1年間で出来た。少女達の日常だった。

1年前に作って貰った料理が余りにも美味しく。青年の「また食べに来ても良いよ。」の言葉から始まったこの生活。少女達は時折と言うか、1週間に4回ほど青年の家に行きご飯を食べると言うのが日課になっていた。流石に食べてばかりも悪いとあって、青年のお店を手伝いその報酬としてご飯を提供するという方式になった。最初は時計屋として働いているのかと思うと、やら家電製品だの自動車だの、チフオージュ・シャトーの大切なパーツだのと時計と関係ないものばかり直していたりする。少女達はほとんど修理屋だと思っているが、青年はかなくなに「時計屋」と言い張っている。

「そう言えば、高校は何処に行く予定なの？」

「私たち、リディアン学園に行きたいんです。それと、おかわり！」

青年は少女達の進路を聞きながら、しゃもじでご飯をてんこ盛りに入れる。

「はいよ。それにしてもリディアンか。あそこって寮あるし、やつ

ぱり寮住まい?」

響にご飯を渡しながら青年は聞いていると、未来が話を切り出した。

「それなんですけど、ここって確か空き部屋有りましたよね。」

「うん、あるね。でもどうしてって……まさか。」

「はい、ここに住もうかなって思ってるですよ。ここうちの学校からもリデイアンから近いし、それに空き家空いてますの看板も目に着いたし。」

「いや、それでも2年後の話だし。もしかたらその間に人が借りにくるかもしれないじゃん。」

「分かりました。だったら、2年間誰も来なかったら住んで良いんですよね?」

「えっと、それは……。」

「いいんですね。」

「あつ、ハイドウゾヨロコンデー。」

少女の威圧に負ける青年であった。

「ムグムグ、あつ、そう言えば!あのチケットどうになりましたか。」

食べている最中に響が突然切り出してきた。

「あのチケットって?」

「あれですよ、アレ!『ツヴァイウイング』のコンサートチケット!常磐さんが応募してくれたんですよ。」

「ああ、あれか。うん、当たったよ。2人用だし響ちゃんと未来ちゃんで見ると良いよ。」

「本当ですか!」

「でも、当たったのは常磐さんだし、悪いですよ。」

「その日に大事な仕事が入っちゃだし、2人で楽しんでくれると嬉しいよ。」

「……ありがとうございます。常磐さんの分も楽しんできますね。」

「常磐さん、ありがとう。」

少女達の笑顔を見て青年も笑う。穏やかな日常が流れていく。

(この子達のために少しは頑張らないとなあ)

このチケットが運命の歯車であると青年以外は誰も知らない。歯車は回り始める。ただし、色々なバク混じった歯車は青年も予測できないほど大きな歪みとなって運命は周り出す。

運命の日まで後1ヶ月。

## 息抜き2020

ifルート

ゲイツリバイブ以外のデメリット付きライダーだった場合  
とある街で奏者と錬金術師達の闘っていた。

「ふん、この程度か。シンフォギア奏者。」

「こんなので終わっちゃうなんて、ちよっと物足りないわね。」

「これで終わりの訳だ。」

3人の錬金術師達の猛攻に奏者達は窮地に立たされたていた。

「クツソタレ……。」

「まだ、やられる訳には。」

少女達は倒れ伏し殆ど力が入らなくなっている中で立花響だけが立ち上がった。

「まだまだ！サンジェルマンさん達を止めて見せる。」

「また、懲りずにイグナイトを使おうという訳だ。」

「無駄よ。このラピス・フィロソフィカスの輝きの前にイグナイトでは敵わない。」

立花響はその言葉を聞きながら、長方形の物体を取り出す。

「エルフナインちゃんくれた、この新しい力『プログライズキー』で  
！」

『ASSAULT WOLF ABILITY』

グリップに付いたボタンを起動して手の武装に付いた窪みに押し込む。

「そんな怪しい物使わせる訳ないでしょ！」

「うわああ!?？」

横からの攻撃に気付かず響は吹き飛ばされ、プログライズキーが錬金術師達の目の前に落ちる。

「なるほど、聖遺物『フェンリル』の牙の力をシンフォギアに加えるアイテムと言う訳だ。」

「確かに、これならラピス・フィロソフィカスの輝きを受けても無効化されずに強化出来るってわけね。」

「考えたようだが、これさえ破壊すれば……！つなに!?？」

プログライズキーを破壊しようと力を込めた時、一発の弾丸が手に当たりプログライズキーが落ちる。それを手に取る者が1人。

「何者だ、貴様。」

「貴方は……、不破さん!?？」

黒いスーツを着てその手には青色の銃とベルトの様な物を持つ青年。その顔には隠しきれない……いや、隠す気のない程に怒りがあつた。

その正体に翼は気付く。その男、不破碇は2課に在籍するエージェントであり、『ツヴァイウイング』時代の奏のマネージャーを務めていた人であった。

『不破あ！何をやってるんだ。勝手に開発中のアレまで持ち出して!!』

インカムから司令の怒鳴り声が聞こえる。

「すみません、司令。でも……、ようやく、ようやく手に入れたんだ。奴らをノイズを滅ぼす力を！」

不破は勢いよくベルトを巻きつける。ベルトには銃を取り付けパーツがありそこに銃を取り付ける。

「ノイズも錬金術師共も、この俺がぶつ潰す!!？」

『ダメです！それは奏者以外には使用できません。適合者以外が使えば命を落とすかもしれませんし、何より使用するにはロックが……、』  
「俺がやると言ったら、やる!!？俺がルールだ!!？」

不破がキーを開こうとするとロックがかけられていて、開けることは出来ない。

「何をやっている訳だ。」

「キヤー、男らしい♡でも、蛮勇よねー。」

「無理だよ、不破さん！逃げて！」

響の言葉に不破が吠えながらキーに更に力を入れる。

「歌なんて……、繋ぐ手なんていらねんだよ!!？奏を失ったあのライブの時から、俺は今日まで怒りだけで生きてきた!!？ノイズは人の大切な者を奪っていく！それを創り上げる錬金術師共も悪意を巻きち

「らす人類の敵だ!!?」

『……ッ!!?』

不破の怒りにエルフナインは怯む。まるで自分にも言われているようだったからだ。

「ノイズを錬金術師共をぶつ潰す!それが……、俺の全てだああああ!!?」

不破の咆哮と共にロックが無理矢理開かれる。キーに付いたグリップを力強く押す。

『ASSAULT BULLET!』

開かれたキーを銃にショットライザーに差し込む。

『OVER RISE!!?』

『KAMEN RIDER KAMEN RIDER』

ショットライザーから音声が流れる。不破は銃を正面に構え引き金を引き抜く。

「変身!!?」

『SHOT RISE』

放たれた弾丸は巨大なオオカミの形となり錬金術師達の前を通る。

「くっ!!?」

「サンジェルマン!!?」

「大丈夫な訳か?」

それに吹き飛ばされ姿勢を崩す。その間に狼は不破の元に戻りそれを左手で握り潰す。

『READY GO!!? ASSAULT WOLF!!』

握り潰された狼は弾け散り不破の身体に鎧となって纏われていく。最後に涙に濡れたような赤いラインが不破の顔に浮かび上がりその上に仮面が形成される。

『No chance of Surviving』

中心部の赤いコアが不気味に光る。

「……変身しちゃった。」

響たちが呆然としている中、指令室の中でエルフナインはどよめきを隠せなかった。

『どうして、扱えるんですか……、プログライズキーは他の聖遺物の共振反応が無いと使えないはずなのに。』

『司令！不破エージェントの変身時、高出力エネルギー反応あり！えっ、反応が2つ？』

『アウフヴァアツヘン波形確認！フェンリルと……っ、これは！』

『 GANG ニールウ、だとお!!？』

指令室のモニターに映される文字。それは紛れもなくGANGニールと書かれた文字であった。

「……いくぞ。」

変身を終えた不破は錬金術師達に向かって歩みよる。1歩1歩確実に。

「行くわ……ココは、アタシに任せて♡」カリオストロ!!？」

1人の錬金術師、カリオストロが前に攻め込み拳を振り抜く。

ガアン！

およそ拳から出るはずない音が鳴り響く。不破の鳩尾に向かって振り抜かれた拳。内蔵が潰れていてもおかしくない程の一撃だったが、

「嘘でしょ、ゴツ!!？」

微動だにしない不破はそのままカリオストロの首にリアアットをかます。そのまま頭を掴み地面叩きつける。

「カリオストロ!!？」

「すげえ……。」

「調べ、怖いですよ。暴れていますよ。暴れん坊將軍ですよ。」

「切ちゃん、落ち着いて。」

カリオストロを圧倒する不破の前に、錬金術師も奏者達も戦慄していた。

「あく、もう！イライラさせるわねえ。」

カリオストロはハート型のエネルギーを飛ばすが、

「おおおおおおおー！」

くらいながらも突き進み、そのままカリオストロに膝蹴りをかます。

「あつつぶない！そう何回も当たらないっての。」

カリオストロは避けながらも巨大なハート型のエネルギーを収束して構える。

「お前に本当の怒りを教えてやる。」

不破はシューティングライザーのボタンを叩く。

『Assault charge』

シューティングライザーをカリオストロに構える。エネルギーが溜まり蒼白いオーラが収束する。

「おつらあああ！」

カリオストロが拳を振り抜きエネルギーが飛ばされる。

「フーン！」

『MAGNETIC STORM BLAST !!?』

ぶつかり合うエネルギーだったが、拮抗したのは一瞬でカリオストロが放ったエネルギーを飲み込み蒼白いエネルギーはオオカミに姿を変えてカリオストロを吹き飛ばした。

「カリオストロ!?!」

「傷が深い、撤退する訳だ。」

カリオストロを保護した錬金術師達はその場で結晶を砕きその場から消えた。

「待ちやがれ!……ガッ、オエ！」

錬金術師達を追おうとする不破だったが、変身が解除され血を吐き倒れ伏す。

かくして、男は復讐の牙を手に入れた。その牙は決して獲物を逃さないとばかりにプログライスキーから不気味な赤い光を灯しあり続ける。

—————

## 設定

### 主人公

中身はゲイツリバイブの人と変わらないけど、奏さんのマネージャーになったifルート。実は特典も何も無い状態で転生されるので唯の一般人だった。奏が死んでしまっただけ、身体を鍛え続

けてきた。そのお陰もあつてか、腕力だけなら指令よりも強いとか言うマジもんのゴリラ。ライブ事件の際に頭にガングニールの破片が刺さっており、これによりアサルトルフに変身できる。

このルートだと、主人公は憎しみと怒りが9割の優しき1割という精神となっており、響たち奏者にち対しても当たりは優しくない。ノイズとそれを創る錬金術師が大っ嫌い。しかし、エルフナインが嫌いと言うわけでは無い。あくまで『ノイズ』を創る錬金術師が嫌いなだけである。

このルートのヒロインは翼かエルフナインである。

翼ルートだと、XVでお爺ちゃんの言いなりになっている翼をマリアじゃなく主人公が説得する。その時にランページガドリリングを使ったりする。

エルフナインルートだと、不破が治療と護衛の名目でエルフナインの付き人になる。時折見せるノイズへの怒りに、自分も悪いんじゃないかと姿を消すエルフナインを見つけて、「俺には、お前（の技術）が必要だ」と公衆の面前で言い放ちエルフナインが真っ赤になって倒れたりする。その後はキャロルと話したり、オートスコアラールとキャロルの意思を内包したオリジナルプログライズキーを使って変身したり、エルフナインがマリアを見て自分の胸をさすってため息を吐いたりなどする。

### ボツ理由

繋ぐ手や歌など本作を真っ向から否定するスタイルを書くのは、なんか違うかなあとおもったから。

## 双翼の歌2048

「未来〜。早く行こうよ!」

響が玄関の外で手を振る。

「分かってるよ。響。それじゃあ、常盤さん行ってきました。」

それに返事をしながら未来は昨日から泊まって家の主である青年に挨拶をし、響の待つ場所に走り出した。

「はいよ〜。気をつけてね。」

楽しそうに歩く2人の少女を見送る青年。2人の姿が見えなくなると青年はリビングに戻り食器を片付け始めた。

「いや〜それにしても、響ちゃんがいきなり「寝坊したら大変だから駅に近いこの家に泊めさせてくださ〜い!」って言ってきた時はびつくりしたなあ。おまけに未来ちゃんも「明日一緒に行くから私も泊まって大丈夫ですよ?」って言ううちに泊まったんだから。」

食器を洗い終え、リビングからお店のカウンターに移動する。そこには修理道具と道具を使って修理しただろうだいぶ年季の入った懐中時計があった。

「しかし、久しぶりに時計屋としての仕事をしたなあ。だいぶ年季が入ってたから気合いを入れて直したし、これならお客さんも喜ぶでしょ。」

そこから1時間ほど経って懐中時計の最終確認をしていると、扉が開いた。

「いらっしやい。頼まれてた時計、ちゃんと直しておいたよ。」

扉から入ってきたのは、大柄な男だった。赤いオールバックの紙に鋭い眼孔。それでいて人懐っこい笑みを浮かべる男だった。

「いや、すまない。動かなくなった時はそろそろ新しい時計をと思ったんだが、近くに腕の良い修理屋があると聞いて訪ねてみ良かった。本当に直ってるな。」

「二応、直せない時計は無い!って自負してますので。……あと、うち時計屋何だけど。決して、修理屋じゃないからね。弦十郎さん」

「えっ、そうなのか!??初めて訪ねた時に冷蔵庫とエアコンを直して

いたから。てつきり修理屋なのかと。それにここを教えてくださいお  
ばちゃんも修理屋だつて。」

「いや、看板に思いつきり時計屋って書いてるでしょ。なんで来る人  
みんなうちの事を修理屋として認識してんだ……。」

オールバックの男、風鳴弦十郎に時計を渡し談笑をしていると弦十  
郎の携帯からアラームが鳴る。

「うん?……もうこんな時間か!」

「どうしたんですか?弦十郎さん。」

「いや、これから大切な仕事があつてな。急いで戻らなくちやいかな  
いんだ。時計、ありがとな。それと代金なんだが……。」

「代金はつけときますから、急いで仕事に向かつてください。」

「いや、それでは。」

「貴方が踏み倒すような人かどうか位は分かりますよ。大事な仕事な  
んでしょ?急いで下さい。」

「……そうか、ありがとう。明日には必ず払いに来る。」

そう言つて、店から走つて出て行く弦十郎。そのスタートダツシユ  
からの速さは見事なもので玄関から出る時にはトップスピードに  
なっておりその姿は見えなくなった。

「……ライブ開始まで後1時間。正しい時間の流れなら、最低最悪の  
あの事件が起きるわけだ。大勢の人が死に一人の少女に過酷な運命  
を背負わせる事件が。」

青年はぼやきながら時計を見る。そのまま顔ひと叩きして、

「さてと、そんな過酷な運命は捻じ曲げてくれますか!なんとたつて俺  
は救世主なんだからね。」

と、宣言して玄関の鍵を閉める。お店の前には「本日は臨時休業!  
直して欲しい物がある方は後日来てください」と紙を張り、裏口から  
出て行った。……こんな張り紙をするから間違えられるのでは?。

翼side

「このステージ照明配置は?」

「客入れ、全て終わりました！」

大勢のスタッフが指示を出し合いながら走っている。さつきスタッフが言った通りに大勢のファンが座って待っている。私たちのライブを見るために。ステージの脇からでも聞こえるファンの喧騒。それが聞こえるたびに私の心臓は鼓動のペースを早めていた。

「大丈夫か？ つくばさきっ！」

後ろからいきなり抱きついてくる人がいた。早まっていた鼓動が一瞬で止まり、その後に更に早くなる。こんな事をするのは彼女しかない。

「ひっ、か、奏え！脅かさないでよ。もう！」

「悪い悪い。本番までまだまだ時間があるから、可愛い翼の驚き顔でも拝んでおこうかなって。」

「もう、かなでつたらしく。」

私は顔が真っ赤になって熱くなるのを感じながら彼女に怒る。それを見ても「やっぱり翼は可愛いな。」私に思いつきり抱きついてきた。奏の暖かさと包容力で顔に更に血が集まっていくのを感じる。

「それにしても、翼はまだ慣れてないのか？確かにこんなに大きい場所は初めてだけど、これまで色んな場所でライブしてきたんだからもっと自信持ちなって。」

「そんな事言っちゃって、緊張するだから仕方ないじゃない。それに今日のライブは私たちだけのライブじゃなくて、人類の未来に必要な……。」

「そう、私たちのライブで高まったフォニックゲインで完全聖遺物『ネフシユタンの鎧』を起動する。今回のライブの最重要項目で、これに成功したら私たち奏者以外でもノイズを殺せる力が手に入るってわけだ。」

奏はウキウキとした口調で語る。……まただ、奏が笑っている。いつも見たいな見ている人を元気にしてくれような笑顔じゃなくて、凜猛で好戦的な笑み。

「……んっ、どうした翼？あたしの顔に何か変なものでついてた。」

「えっ……、大丈夫だよ。」

そっか、と言つてすぐにいつもの奏に戻った。

あの日、謎の戦士ゲイツリバイブに助けられて以来、奏は少し変わった。ノイズに対する彼女の怒りは前から持っていたけど、それが更に強くなった。それに食欲なまでに力を得ようとしている。最近はその成果もあり、奏はシンフォギアを纏う時間が増えていった。それは素直に喜ぶべきなのだろうけど、私は怖い。奏がだんだん離れていくような気がして、このままじゃ奏に置いてかれる。そんなのは駄目。私は防人で国を守る剣で、みんなの為に戦わなきゃ……「おっ、つくばくさ。」

「えっ、」

「えっ、じゃないよ。急にぼつくとして、どうしたんだい？もうすぐ始まるよ。」

奏がにっかつと笑いながら、私の手を引く。

「世界に必要なライブかもしれないけど、今日は私たちのステージだ。思いつきり楽しまないとな。」

「……うん！奏と一緒にならなんとかなる気がする。」

そうだ。私は奏と一緒にいるって決めたんだ。どんなことになっても奏の側と一緒に戦う。だって私たちは、

『本番まで、後30秒！』

「わたしとあんた。両翼が揃ったツヴァイウィングは、」

「どこまでも飛んでいける！だよね。」

『10秒前、10、9、8……』

「そう言うこと。んじゃ、行くよ翼！」

わたしと奏はお互いの手を握りながらステージへと上がった。

翼 side out

とある会場に人々が集まる。その周りにはディスプレイの付いたバルーンが飛びまわり、ディスプレイの中には2人の少女が映し出されている。会場の内でも2人の少女達の幕が貼られ、たくさんの少女

達に関連した販売物……、いわゆる関連グッズが売られてあった。少女達は『ツヴァイウイング』と呼ばれる歌唱ユニットである。

1年前に超新星の如く現れ、デビューして僅か半年で武道館でライブが行われ海外からも注目を浴びるほど有名になったのである。このライブは『ツヴァイウイング』デビュー1周年を記念したライブであり、優先席のチケット倍率は数えるのも馬鹿らしくなるほどに高くなっていったらしい。

その優先席に座る2人の少女。彼女達は今日が初めてライブに来たこともあつて、周りの熱気にすごく戸惑っているようだった。

「未来、すごいね……。」

「うん、こんなに集まってるんだもん。はあ、常磐さんも来れたら良かったのに。」

「しよがないよ。常磐さん、仕事が入ったって言ってたし。だから常磐さんの分までしっかり楽しまないと！」

「うん、そうだね。あ、響見て。始まるよ。」

未来の声に響がステージを見る。ステージには白い羽がひらりひらりと落ちていく。

前奏が始まる。曲と共に少女達が舞い降りる。その幻想的な姿に先程までの喧騒は消え、伴奏以外何も聞こえなかった。2人の少女がステージに降り立つ。

瞬間、先程の喧騒を凌駕するほどの喧騒が会場を揺らす。2人の少女がステージから観客に向けて手を振り、伴奏に合わせて踊り出す。ステージの状態は最高潮になり、更に高まろうとしていた。

「イエー！」

響と未来が他の観客に習いサイリウムを掲げ振ると同時に彼女たちの歌が始まる。

『聞こえますか？ 激情奏でるムジーク』

『天に』

「「「と・き・は・な・て!!!」」」

少女達の歌に合いの手を入れる観客達。2人の少女の代表曲『逆光のフリーユージェル』それは、天羽奏だけが歌っても、風鳴翼だけが歌つ

ても何かが足りない。まさに双翼が揃ってはじめて完成する曲であつた。

『君と僕は コドウを詩にした。』

少女達はステージの上を走り出す。それに合わせて会場に変化が起る。

『そして』

『夢は』

『開くよ』

『見たことない 世界の果てへ…』

天幕が動きはじめる。外から夕陽の光が少しずつ照り始める。

『Yes, just believe』

天幕が完全に開き、夕陽が海をステージを少女達を照らし出す。その幻想的なステージは見るものを魅了し、ステージへの歓声は今日、最高を超えてどこまでも高まり続けた。

『涙で 濡れた羽 重くて飛ばたけない日は Wish』

曲が終盤に差し迫る中、響と未来の心には興奮や感動が高まってく。

(ドキドキして、目が離せない。凄いよ！これがライブなんだ。)

(観客と一緒にあって奏でて、知らない人とも分かり合える。凄いな！これがライブなんだ。)

『2人でなら 翼になれる Singing Herat』

少女達の歌が終わる。それでも観客達の高まりは落ち着くことなく。みんなが余韻に浸りながら次の曲を待ちわびていた。夢のようなひと時、

ドカン!!?

それは、

「きやああああ!!?」

「なんだ?急に。」

「爆発……、おい、あれって!」

一瞬にして、地獄へと変わり果てた。

「の……ノイズ☒」

「嘘だ……ぎやっ!？」

「お、おい。逃げる!!？」

「どけよ！俺が逃げるんだ。」

「テメエがどけて……ごえ！」

観客達は途端にパニックになり誰もか誰もか誰かを押し除けて逃げようとする。それを嘲笑うかのように少しづつ少しづつ迫り、人々を炭に変えようとするノイズ達。それを見て翼は呆然としていた。

「飛ぶぞ！翼。この場で戦えるのは私達しかない。」

「えっ、で、でも」

「でもも、ヘチマもねえ！私達以外止めれ奴がいなっ……!？」

奏が声を荒げようとした時に後ろから轟音が鳴り響く。振り返るとそこに先程まで人々を襲おうとしたノイズ達は半分ほど消し飛ばされ観客達はそれを行った者を呆然と見ている。

パワード タイム

突如この場に似合わない音声が鳴り響いた。それは1人の戦士の開戦を伝える合図である。夕陽に照らし出される紅き鎧。手にはこのような武器を持ち、それを振り抜いたであろう体勢で立っていた。

リ・バ・イ・ブ

空を飛んでいるノイズ達はその状態の戦士に襲おうとするが、後ろから金色の文字に轢かれ消滅していく。その文字は戦士の仮面にぶつかり『らいだー』の文字が仮面に浮かぶ。

剛烈！ 剛烈!!？

その姿を見て奏と翼は驚愕する。

「あれって、」

「ゲイツ……リバイブウ!!？」

戦士は後ろの人達を軽く見るとすぐ様戦闘に移る。

「翼!!？いくぞお！」

「奏……、分かった！」

奏は獰猛に吠えながら駆け出す。翼もそれを追うように戦場に駆け出した。

「Croitzalronzell Gungnir ziz  
zil」

「Imyuteus amenohabakiritron」

2人の少女の歌が聞こえる。

一つは人々を守る防人の歌。

一つは憎しみと憧憬が混じったような歌が。

2人姿が変わり戦場に舞い踊る。

1人は青に、1人は黒に染まりながら。

先程までの夢のようなひと時に変わりライブ会場は地獄と化していた。多くの人々是我先にと逃げようと押し合い、蹴り合い、罵り合いと3拍子揃った暴徒となり自分だけが助かろうとノイズから逃げていた。

「どきやがれ！俺はまだ死にたくないんだ。」「てめえこそどけよ！じじいが！」「おかくさーん」「うるせえ！クソガキどけえ！」「あんた私の為に死なさないよ！」「テメエが死んでろこのビッチが！」

倒れた人を踏みつぶし、前にいる人を後ろに引っ張りそのせいでただでさえ狭い出口はどうしようもないほど酷くなっていた。その時、「おいーアレみろ。」

誰かが叫ぶ。それを見て上を見ると建物を支える柱がと電光掲示板がずり落ちてきている。ゆっくりとされど確実に落ちてきている。

「おい、早く出ろよ！」「死にたくない！」「お前ら邪魔だ！早くどけ！」数々の暴言が飛び交う中、電光掲示板は限界を越えて勢いよく落ちてきた。避けられない死が誰にも等しくふりそそぐ。全員が最後まで罵り合いながら逃げようとするなか、

ビツシ！

巨大な布の様な物が電光掲示板と柱に巻き付いた。それにより勢いが殺され人々を潰す直前で止まる。その場にいる全員が呆気にとられる中、

「早く逃げてください。」「こちらに押さない様に。」「こちらにまだノイズはきていません。」「落ち着いて速やかに避難するんだ。」

突如現れた集団が出口への避難誘導を始めた。それに気づきまた我先にと逃げようとする者もいたが集団の人々が的確にテキパキと避難させるところを見て落ち着き始めた。集団は出口の近くを破壊して通りやすくしたり、暴れている暴徒をノックアウトファイターしたり、踏まれて怪我をした人建物の潰されて身動きが取れなくなつた者を救い上げたりとそれぞれが己の出来ることを十全にやっていた。

「こっちは足が潰れて、片方は踏まれて全身がバキバキになってやがる。誰か、運べるヤツいないか?」「私に任せろ!ベンチプレス500キロまでならいける2人くらい余裕だ。」「会場から出る為に窓とか壊したいけどなんかいい者ないか?」「任せろ、少量だが爆薬があるそれで大丈夫そうなどころを破壊する。」「

その集団は全員がボロボロのコートに灰色のマフラーをつけており、側から見るとコスプレ集団ではない。そう呆氣とられながらもその集団に案内され逃げる人々。ズドン!つと電光掲示板が壁の方にゆつくりと置かれる。先程まで巻きついていた布は少しずつ小さくなりとある青年のもとに戻った。その青年はこの集団と同じ衣装であったが、1人だけベレー帽の様な者を被り、片手に「救世主降誕暦」と書かれた本を持っている。

「君たちは引き続き、ここにいる人々の救助と避難を取り急いでくれ。」「

「「「了解!」「」」」

その青年の号令に全員が腕を上げて返事をする。

「頼んだよ。私はこれから1番大事な仕事をしてくる。」「

そう言い出し、青年は飛び降り、鉄骨を蹴り、壁を走りノイズ達がいる会場の方にかけて行った。それを見送るとコートの集団は避難と救助を再開した。

「えつと……、あなた達は?」

助けられた人々を代表して少年が話しかける。それを見て彼らは手を休める事なくされど全員で言う。

「「「私たちは『クオーツァー』救世主と共に世界を救う為に動くものです!!?」「」」」

主人公 s i d e

いきなり現れた謎の戦士の一撃により火蓋は切られた。

……登場早々ノイズに向かって、のこ切斬をスパークインツ!ヒヤツ

ハー！お陰で最初の1割ぐらいいは一気に削れたべ。いや〜それにしてても、右ノイズ、左ノイズはあく〜一面くそノイズですわ。

と言うか、今からこの一面くそノイズを殲滅しないといけないよね。はあ、だるいよ〜。今からでも帰ろうかしらん。

& a m p ; ) @ ; ) & a m p ; ; : @ ! : @ & a m p ; ) / @ " ; ! : @ & a m p ; ; | . ; ; @ x b ~ ~ ♪

うわ〜、なんかノイズがいっぱい鳴いてる〜。さっきまで人を襲つてだ奴もなんかこつち見てるし、……アレ？これひよつとしてヤバいの出〜

( ) . @ : @ k o r o s U h o . / @ 4 2 7 x s b m n a 3 1 ~ ~ ♪  
アツブネえ！なんかほとんどのノイズこつちにきてない？やっべえ、めつちや突撃してくるんやけど。

「オラア！」

そんだけ集まるなら我がのこの一撃の餌食にしてくれるは！くらいやがれ！超必殺、飛鳥文化アタック(のこ切斬)！ハツハハどうよ。この火力、私の力は想像以上だ！

. : ! ) | 8 2 : 8 @ 1 ) : 9 9 | k o r o s U k o J . / @ x w h d k ~ ~ ♪

あつれ〜、全然減つてなくね〜。なんかむしろ狙ってくるヤツ増えてね？つてまたきた!?!イテイテイテイテ、やめんか！

「……ッ、ハア！」

拳振り抜いて衝撃波で全部ぶつ飛ばしたけど、今のはヤバいからやめろや。

いや、剛烈の防御力からしたら、さっきのは全然かすり傷にもならないけ衝撃で動けなくなるのはマズイ。

「……グッ！」

……なんか急激に身体が重いんですけど、昨日の傷がまだ癒えていないから本当にヤバイ。さっさと決着をつけてやんよ！

ジカンジャック！

. 3 8 : @ x a g u y s o k a & a m p : 2 9 : & a m p ; . : x N j s j d l s ~ ~ ♪

まくた、纏わりついてきたけど都合。全部纏めて終わらしてやるから、みとけよく。龍神の剣をくらえ！

スーパァーのこ切斬！

ハツハハ、文字通り壊滅！ザ・エンドってね。……さて、そろそろ響ちゃん達の安否を確認しないとな。無事に逃げ切れたら良いんやけど……ん？

—?4▪;8/&amp;;j d k s g z u i x j j d € >?>.  
€ , > ~ ♪

ウツソだろおまえwww。つて、マジで笑えねえよ。これで全部減らねえとかどんだけいるんだよ。まだいけなくはないけど、ジリ貧になるからなあ。

「はっああああー！」

後ろを見て見たら、翼さんと奏さんが戦ってるのが見える。初めて見た時よりも強くなってると、ヤツベカツケエ！翼ちゃんはさらに剣速速くなってるし、奏ちゃんのスーツなんか凄く黒くなってると、あんな姿あつたけ……?まあいいか。それに、槍持ってこつちに振り落らそうとしているし……へっ？

ガアアアアアンツ！

あつ、……ぶねえ！いきなり奏さんに襲われたんですけど。とっさ右腕で槍を弾き返したけど、なんか余波でノイズが消し飛んでるし。……一発だけなら誤射かも知れないって言うから、一撃だけなら手が滑ったって事なのかなあ、ハツハハハ

「おりゃアアア！」

ブンツ！

ホワアアアアア！絶対に誤射でも手が滑ったわけでもなくわ俺狙ってるじゃないですかヤダー!!?なにになに?俺なんがしたつけ……、いや、現在進行形でやってるなあ。

「だああああー！」

「……ツ！」

ガツギン！

だって、正体の不明の奴がノイズを2課の人が来る前に倒して帰るんだから。しかも、どこの国とも関わり合いが無い本当の意味でのアンノウンみたいなもんやしそりゃ捕獲命令くらい出ててもおかしく無いはな！

「クツソが！あたし程度ならその武器を使う必要がないってか！」

奏さんの目が更にギラついて俺を睨んでくる。違うんです、舐めるとかそんなじゃないんです。この武器マジで加減が効かないんです。100か1000みたいなMAXかOverしか出せないんです。そんなに殴ったら翼さんがSAKIMORIになっちゃう！

「だったら、コレデ！」

奏さんが天高く飛び上がる。槍は黒い片翼の様に見える、神秘的だし、何よりあのおっぱい！躍動してるよ！凄いよ！オツパイプルプルン（語彙力の敗北）!!？

……はっ！しまった。オツパイプルプルンに夢中で槍のことワスレテーラ。

「コレデ、どうダア!!？」

投げられた黒い槍がだんだんと大きくなる。避けようにも後ろに人いるし、やつべえ、避けたらダメなやつじゃん！でも、必殺技発動する暇ないし、でええい！こうなりややけだ！

「はあー！」

のこ切斬!!？

ギユユユイイイイ、ガアアアアアン！

いつてええええ！でもなんとか弾けた。ヤバイ腕が上がりなくなってきたるし、でもさっきの余波で結構ノイズ減ったしこれならどうにか……、

「なんで……、」

それにしても、こんな黒い形態あったけ？持つてる槍も黒いし、オリジナル形態って奴？いや、確かシンフォギアにはスマホアプリがあったし、そこにはあるのかもしれないし。

「ナンデ……、」

それにしても、やっぱり凄えムチムチボデエやなあ。了子さんもう少しアーマーどうかできひんの？こんな公衆の面前に晒しちゃダメやろ。こんな若い子に着させるものじゃ絶対ないやろうし。

「ナンデー・トドカナイだよ！」

奏さんが叫ぶ。まるで悲鳴にも似た声で。

「なんでアンタにはそんな力があるのに、あたしにはないんだよ！」  
涙に顔を濡らして俺に叫ぶ。

「なんでアンタはそんな力があるのに、間に合わないんだよ！」  
俺を糾弾するように叫ぶ。でも、

「そんな力があるなら全部助けるよ！救世主なんだろ?!」

それはまるで、奏さん自身を責めてるようだった。

「大勢の人を助けて、自分に自惚れてるんだろ？その前に亡くなった奴らの事なんか一つも考えないで、お前あたしがもっと速くくれば助かる命もあつた。お前あたしが時間をかけなかったら救えた命があつた！お前あたしが最初からその力を持っていたらこんな事にはならなかった。いつもいつも、お前あたしは遅いんだよ!!？」

奏さんは更に叫ぶ。俺を、自分を罰するように、

「だから、あたしはお前を認めない。あたしは誰よりも、お前よりも強くなつて、お前を否定してやる。」

槍を突きつける。俺を見つめる瞳はどこまで昏く、そこからは赤い液体が流れていた。